

## ラグビー雑話

元熊谷商工高校ラグビー部監督  
元熊谷工業高校ラグビー部監督  
現埼玉大深谷高校ラグビー部監督

森 喜 雄



県ラグビーフットボール協会の記念誌発刊に当り、長年ラグビーに携わって来た一人として、この機会に数多い思い出の中から二・三思いつくままに、ラグビーに関する雑話を書いてみたいと思います。

私は40年以上に亘って高校ラグビーや、協会事務運営をやってまいりました。その間ラグビーを通して数えきれない程の思い出があり、私の歩んで来た道は、まさにラグビー人生であり、それはまたラグビーを通しての喜怒哀楽の人生でもありました。

特にここに記したことが、一番感銘が深かったでき事と言う訳ではありません。普段あまり他人に話したり、書いたりしたことがない様な気がしましたので、敢えて取り上げて見た次第です。

### ◇ 金玉を蹴り上げろ

昭和28年熊谷商工高校が関東地区予選に勝って、四国松山市で開催された第8回国民体育大会に、ラグビー競技として初めて出場した時の話であります。

熊谷商工高校にラグビー部が誕生したのが昭和23年、初の県下優勝が26年の春の学徒総合体育大会であります。しかし、優勝と言っても高校チームは6～7校ですし、また関東各都県に比べれば、未だ未だ非常に低いレベルでした。

にもかかわらず国民体育大会に出場出来たのは、籤運に恵まれたからかも知れません。初の全国クラスの大会に、出場権を獲得出来たのだから夢のような話でした。部活動の運動部で国民体育大会に、単独チームで埼玉県代表として、出場するのも初めてのことなので、学校を挙げて声援をしてくれたし、大変な出来事でもあり喜びでもありました。

熊谷市でも当時としては国体出場は珍しく、この出場に際し、20万円の補助金を、支出してくれる力の入れようでもありました。加えて市議会議員2名が国体視察と言う名目で、我々遠征チームに同行しました。たまたまこの市議会議員の方は、

本校のPTA会員でもありました。

話題の中心は、この同行の方達のことであります。

当時はラグビーと言っても、殆ど知っている人はなく、高校生でさえも学校で体育の授業か、部活動としてやっていない限りは、無知に近く競技内容など知らない生徒が多かった時代です。

況して熊谷市の市議会議員と言っても、農村部の出身で農業を主とし、戦前の教育を受けた方でしたから、この国体に同行して、ラグビー競技も初めて見たのではないかと思います。

国民体育大会のラグビー競技は松山市で開催され、松山商科大学グラウンドに於いて、京都府代表の同志社高校と対戦いたしました。愈々試合が始まりましたが、試合内容は最真目のせい、本校の方が稍押し気味に展開している感じでした。ラグビーはご承知の様にスクラムで押し合い、タックルがあり、ルーズスクラム（現在のラックプレイ）あり、或いはキック、ハンドオフとボール持って縦横無尽に走る格闘技です。これを見て、彼の市議会議員はすっかりラグビーの凄じさに引き込まれ、興奮してしまったようでした。タックルもただ無茶苦茶に飛びついて倒すものと思ったのかも知れませんが、また身体と身体が激しくぶつかり合ったり、相手を蹴ったり、或いはハンドオフもきつと殴っているものと勘違いしたと思います。大きくしかも「ドス」の利いた声で、さかんに「ぶち当れ」、「それ頑張れ」、「それ走れ」と言っていた時は良かったのですが、丁度二人の目の前で、本校の生徒がたしか相手に対してタックルをした時、それが上半身に行ってしまうと、今のモールみたいな形になった時でした。「今だ。それ金玉を蹴り上げろ」、「金玉を蹴るんだ」・「金玉を狙うんだ」と大きな声で、真剣にしかもたて続けに叫んだものですから、周りにいた双方の応援団や見物の人達も、この声に爆笑してしまいました。私もついっられて笑ってしまいましたが、本当は笑っているどころではなかったのです。自チーム

の応援団の者だから、このままにしてまた何を言われるか分かったものでないから、早速そばにとんで行きました。そして、ラグビーは喧嘩ではなく、英国では紳士のスポーツと言われていること、また野球の応援とは違うことを手取り早く説明をしました。それでも「一方的にやられては口惜しいじゃないか」「少しは仕返しをしなければ腹の虫が治まらない」とか言っていましたが、しかし、本校のチームや先生に迷惑が掛るのでは仕方がないと言って、その後はおとなしく応援をしていました。

試合の方は時間の大部分を3対0とリードしながら、終了間際5分前に味方のちょっとしたミスをつかれてワントライを許し、3対3の同点（当時トライ3点）にされてノーサイドとなってしまいました。そして抽籤負けをしてしまった苦い経験と、味方応援団の思わぬ野次で大慌てをしたり、気を使ったりの一戦でした。国体初出場に話しが及ぶと、このことが必ず出てまいりますし、自然と笑いの出る懐かしい思い出となっております。

### ◇ あがってしまったこと

熊谷商工高校が昭和34年1月1日より開催されました、第38回全国高校ラグビー大会に初出場した時のことで、今から約31年前の話です。

会場は未だ西宮球場で、ラグビーとサッカーが同じ会場で隔日実施をしておりました。その後名神高速道路建設のためにグラウンドが使用出来なくなり、4年後の第42回大会から現在の花園ラグビー場に移転された訳です。当時の出場校は、第37回大会より16チームから32チームに倍増された時でもあり、以前より全国大会出場も大変楽になった訳であります。

本校の第1回戦の相手は天理高と決まりましたが、天理高は関西地区の名門校で伝統もあり、全国大会出場の常連チームでした。しかし、今の様に情報面は発達していませんから実際には前述のことや、その年のチーム力のこと等については全然知りませんでした。

本校のチームは相変わらず小さい選手ばかりで、特にフォワードやバックスに特長がある訳でなく、ごく平凡なチームでした。しかし、小さいながらも粘り強く、おとなしいが気力の点に於いては、決して他のチームにも劣るようなことはありません

でした。一方天理高も体格は本校より稍大きい位のチームでしたから、割合に戦い易かったと思います。

さて、全国高校ラグビーフットボール大会初出場と言うことで、選手でなく監督の私が大会の雰囲気や飲まれてしまい、すっかり上がってしまいました。ですからいつもと違い試合前の注意も、適切な指示が出来なかったと思っています。それでも円陣を組ませて、何にかを話したとは思いますが。

愈々試合が始まり選手と一緒に、試合をしている気持ちで、チームの一進一退に一喜一憂しながら夢中になっていました。そうこうする中に前半の半ばに、相手チームにワントライをされてしまいました。私自身上がっていて冷静さを欠いているものですから、本校チームの防御の甘さや攻撃の欠点、或いは試合全体の攻防のポイント等が、全然掴むことが出来ないままにハーフタイムに入ってしまった。

普通ハーフタイムの時にはチームの攻防について、特に悪い点を二・三注意しておりますが、この時ばかりは上がっていて何にが何んだかとかく夢中なものですから、ハーフタイム時の指摘事項が見つからないのです。選手達は先取点を取られて負けているものですから、円陣を作って私にどんなふうにかられるか、不安そうに待っている訳ですが、この時ばかりはその円陣に向ってグラウンド内に入るのが怖い位でした。私自身興奮していたので務めて平静を装うとするが、身体は小刻に震え、選手達に話す声はうわずってしまい、よく出てこない状態でした。そして、私自身選手達に何を話しているのか、全然分かりませんでした。しかし、試合は今迄に何百回となくこなしておりますので、上がっているとは言え、何とか試合についての話しはしたと思います。普段と違って私の様子に、選手達も今日の監督はひどく興奮していて、おかしいなあと思いついたことと思います。

試合の方は、私が上がってしまって、ハーフタイムに適切な指示が出来なかったにも拘らず、後半は選手達の頑張りでワントライを返して、3対3の同点に持ち込み抽籤勝ではありましたが、初出場ながら2回戦に進出することが出来ました。

私の40年と言う長い監督生活を振り返って見ま



すと、大きな全国的な大会や、県内の試合に於いても絶対に勝たねばと思うと緊張もしましたが、この時をおいては後にも先にも、こんなに上がってしまったことはないのではないかと、照れくさいやら恥ずかしいやらで、今迄、誰にも話したことはありませんでした。しかし、全国高校大会初出場の話になる度に、若き日の自分だけの思い出としての懐かしい一戦でもありました。

また、私達県内高校ラグビーの指導者達は、試合前によく雑談をいたしました。その中にこれと同じ様なことがあるのです。この話しは何回となく聞き、聞く度に私と同じだったのかいなあと、前述のことを思い出しながらこそばゆい気持ちでした。いや大学の監督だから我々と違って、そんなことは無いだろうと思ったりもしました。この話しは決してT先生が話し出します。某大学のラグビー部の監督が、試合のハーフタイムに選手達を集め、おもむろに口を開き、先ず「フォワードは行け」そして一拍おいてから「バックスも行け」と言って後の注意等は何もないと、面白おかしく話すものですから、その場に居合わせた高校の先生方は、つい声を出して皆「ゲラゲラ」と笑ってしまったものでした。私もつつられて笑ってしまいますが、その度に当時の自分を思い出したものでした。

しかし、この「フォワードも行け」「バックスも行け」と言う簡単な言葉、こんなことは高校生、大学生になれば誰でも知り尽くしていることであり、フォワードやバックスが行かなければラグビーにはならないのは当然で、誰もが大学の監督からこんな単純な言葉が出るとは思わないから、一層面白くもあり笑いも出るというものです。その言葉は簡単明瞭であるが、又ラグビーには意味深長な、そして絶対に必要不可欠の内容でもあるなあと思ったりしたものです。

#### ◇ 泣き事を言うな

何時の頃かはっきりと覚えてませんが、たしか昭和20年代の後半か30年代の始め頃の事だと思います。この話しについては前に一度書いたことがあります。私のラグビー監督人生にとって非常に尊い教訓であり、終生忘れ得ない一つでありますので、再度とり上げてみました。

当時本県の高校チームの実力は、関東各都県の

中では残念ながら下位のレベルでした。ですから国民体育大会や全国高校大会に、出場することは容易な事ではありませんでした。しかも国体関東地区予選等の組み合わせが、本県は常に関東地区でも一番強い、東京都と必ず組むことになったり、時には神奈川県に当る羽目になったりしました。また全国大会の関東地区予選でも神奈川県（慶応高の全盛時代）や、群馬県（高崎高の全盛時代）と当る不運が続きました。

それでも全国大会関東地区予選は抽籤でしたが、国体関東地区予選は抽籤とは名ばかりで、組み合わせは始めから決まっているようなものでした。本県では殆ど熊谷商工高校が県代表として出場していましたが、戦う前から結果が出ている様なもので、この件については不満で不満でたまりませんでした。

当時国民体育大会や全国高校大会で、優勝を競い合っていたのが、東京の保善高校であり秋田工業高校でした。その東京と対戦するのですから、チーム力の差は非常に大きかった訳です。

一方東京都としては埼玉県と組むことは、まさに赤子の手を捻る様にたやすいものでした。私とすれば、若しかして東京都や神奈川県と当らないで、他の県と組んでいたなら何とか勝負になったのではないだろうか、時には出場の可能性もあったのではないだろうかと思えます。毎年同じ様な組み合わせでは、何か埼玉県ばかりが貧乏籤を引いている様で、只黙ってじっと我慢をしてはいられませんでした。

これでは埼玉は何年たっても、絶対に浮べれないと思うと、不満は愈々募るばかりでした。高校の関東各県代表の席上で、この国体関東地区予選の組み合わせの件で提案をしました。特定の県だけが東京の隣接県と言う名目だけで、常に東京と当ることは国体出場の道を閉してしまうことであり、隣接県は埼玉だけではありません。東京や神奈川県同士は一度として当っていない。埼玉だけでなく各県とも、強い東京都に順番に当るべきであり、埼玉の立場としては納得出来ないで、今後この点についても考えて欲しいと強く主張しました。その当時東京、神奈川が当らない理由として、私はこう考えていた。（その第一として両者とも関東地区ではチーム数が非常に多いこと。第二としては両者とも、全国的に見ても高校のレベ

ルが非常に高く、強い者同士のチームを関東から失い、反面弱い県が出場することは好ましくない、とみていたのではないかと思います。）

その時この件について、東京都保善高校の高崎米吉校長先生（当時全国高体連ラグビー部長）が、これに対して答弁しました。「組み合わせ云々でどうのこうの問題ではない、先ずチームを強くして相手に勝つことだよ。そんなことを言っておれば、何時迄たっても埼玉は東京に勝てないよ。先ず東京に勝つ様に一生懸命に努力することが、必要だよ」と言われました。確かに高崎先生の言われる通りですが、その当時は本県が東京チームを倒す事など到底無謀にも近く、また夢の様なことでありました。

現に関東地区各県の中にも、本県と同じ程度のレベルで国体等に出場しているのに、東京都と当るばかりに、出場チャンスの閉ざされていると思うと、残念でたまりませんでした。私には高崎先生のお言葉を素直に、受け入れるだけの度量も無ければチーム力の強さも持たず、かと言って東京を負かすだけの気力もありませんでした。この件については、その後も高崎先生に個人的に善処方をお願いしたこともありました。何にしる全国優勝する程の力を持つ東京保善高校ですから、本県代表の本校を相手にするのに、二軍で丁度よい位でしたから、つい泣き事も出るというものでした。しかし、この無理な組み合わせと、私の泣き事に同情したのか、その翌年から今度は千葉県が肩変りをして、その後数年続きましたが、その後は関東各県が順番に東京都と当る様になりました。今はこんなことが、昔はあったことを知る人も殆どいなくなりました。

その後東京都の高校ラグビーの勢力圏も、保善高から目黒高、国学院久我山高時代と変わってしまいました或る年、高崎先生とたまたまお会いしたことがありました。その時先生は淋しそうに「もう保善ラグビーも終りだよ、すっかり駄目になってしまったよ」と嘆かれておりました。「うちに比べて森君のところは息も長く、益々強くなって立派なもんだね」と褒めていただきました。「いやこれも先生のご指導があったればこそ今日の熊谷工高があるのです」と、お礼を申し上げたことがあります。

その後、本県もチーム数の増加にともない段々

と強くなりチーム力が向上しました。全国大会や国民体育大会にも連続して出場出来る様になるばかりか、東京都に勝つことは夢の様なこととされていたのが、今は両者全く力の差はなくなり、ご承知の様に現在は東京都の強敵となる程の力を付けて来た訳であります。今になって始めて、その当時「強くなればいいのだ」、「そんな泣き事を言っていないで、東京に勝つ様になればよいではないか」と言われたことを、素直に受け入れることが出来る様になりました。

泣き事を言う前に努力もしないで、組み合わせや条件が悪いのと思ったり、口にすることが恥かしく思います。努力もしないで楽なことを考えていた甘い気持ちに、活を入れて下されたことに、今は感謝しております。そして全国的に見ても常に上位にランクされる様になったのも、苦しさにめげずに耐えて来た時代が、あったればこそ思っております。ラグビーばかりでなく、私の人生に於いてもこの経験は尊い教訓として今も生きております。

よく高校の指導者の中に、自分の学校ではこれ以上強くはなれない。これ以上向上することは、難しいと言う方がおります。例えば、学校が悪い、部員が集まらない、ラグビーや運動をやる環境や条件が悪い、或いは生徒の素質や能力がなくて駄目だと言うことを耳にすることがありますが、何とか工夫し、努力し、熱意をもって指導すれば、その成果はそれなりに必ずあるものと思えます。

#### ◇ 試合までのプレッシャー

「ラグビーの試合の時に先生を見ていると、得点されたり得点をしたり、或いはチャンスやピンチになっても、あまり表情を変えることはなく、平然としておりますが、私などは第三者でありながら試合の状況で喜んだり、冷や冷やしたりして、心配で心配でとても落ち着いて見られなくなってしまふのに、先生は悠然と構えて居ますね」とよく言われました。また、「ハーフ・タイムの時は選手にどんなことを話すのですか」とか、「試合中に選手に指示を出しているのですか」とか聞かれたことが度々ありました。

私も試合をやるからには、是非勝ちたいと思っておりますし、選手と同じ気持ちで試合の成り行きに注目しています。また内心では得点をすれば喜び



もし、逆に得点をされれば口惜しさは誰にも劣りませんが、只なるべく興奮をしないで、試合の展開を冷静にみようとしています。

試合当日のチームの戦い振りに神経を使うことは勿論のこと、それよりも何によりも試合開始の笛が鳴る迄の精神的なプレッシャーは大変なものです。それぞれの大会によって違いますし、例えば本校のその年のチーム力、或いは相手方のチーム力等によっても、それぞれ差はありますが、私が監督をやっている、この試合前のプレッシャーが苦痛の一つでもありました。

県高校大会の年間の公式戦としては、春の関東高校大会予選、国体県予選会、秋の全国高校大会予選及び新人戦と四つの大きなタイトルがありました。新人戦を除いてはすべて上の大会に続いており、即ち関東高校大会、国民体育大会関東予選及び本大会、そして花園ラグビー場で開催される全国高校大会と、年間通して数多くの大会があり、その大部分に関与して参りました。これ等の試合内容は楽勝したもの、辛勝のもの、惜敗した試合、また全然ラグビーにならず大敗してしまったものと、いろいろのケースがありました。そしてその一試合、一試合が懐かしい思い出があり、試合前には多かれ少なかれプレッシャーを感じたものでした。県代表として出場権を獲得したのもあれば、残念ながら出場権を手中に出来なかった年もありました。

何れにしても、当日の試合もさることながら、当日までの精神的プレッシャーが大変でした。優勝は出来るだろうと思っはいるけれど、万が一実力が出なかったらと考えると不安でたまらないものでした。勝負は勝つまでは絶対に安心出来ないし、勝とうとするから余計にプレッシャーが掛かったものでした。

国体予選や全国高校予選に優勝して、代表権を勝ちとりたいと思うと、準決勝や決勝戦の日が近付くにつれて、選手ばかりでなく監督も緊張感が高まり、精神的プレッシャーを強く感じて来るのは毎年の様に経験しました。対戦するチームが好調であればある程、余計に不安はつのるばかりで、相手チームの良いところが目立ち、味方チームの悪い面が次から次と浮んで来るのをどうすることも出来ませんでした。相手のフォワード力はどうだろうか、バックスの走力はあるだろうか、或い

は味方選手の故障者が試合迄に快復して出場出来る様になるだろうか、あれやこれやと神経を使ってしまう。

県大会の決勝戦に優勝し、出場権を獲得したいと思えば思う程不安はつのるばかりです。第三者の方が「今年は熊工は強いから出場は絶対ですね。」などと言われても、またあれだけ練習をやったのだから大丈夫だと思ってみても、心配は依然として去らないものです。授業や何にか仕事に熱中している時はいいが、そうでない時はすぐラグビーの試合の事を思い出してしまいます。こんな時期は夜眠っていても、ラグビーを夢で見たことも何度もありました。

試合の対戦相手は決ってG高であったり、A高であったり、時にはどこのチームか分かりませんが試合をやっているのです。試合は負けていて相手ゴール前で攻め抜いているのですが、仲々トライが取れないのです。本校の選手がボールを持ってゴールに向かって走っているが、ゴール前でノックオンをしたり、反則を犯したりして仲々得点になりません。プレイしている選手一人一人が誰であるかはっきりしません。

試合の場合に大きな声を出したり、タッチ・ラインぎわまで行くことは殆どないのに、夢の中では大きな声を出し、タッチ・ラインまで行ってどなっているのです。時間はどんどん過ぎてノーサイドの笛が吹かれて、結局3対0か4対0で負けるのです。ああ今年はどうとう決勝戦に敗れて、全国大会出場は駄目なのかと、私や選手のがっかりした姿で終り、はっと目が醒めて夢で良かったと安堵の胸をなでおろしたことも何度かありました。

また、何時だったか憶えていませんが、こんなこともありました。全国高校大会県予選も段々と勝ち進みました頃に、体の調子がおかしくなって来たのですが、特に胃の調子が悪くなり下痢をしたり、腹がはって異和感があったり、また食欲もなくなってしまいました。しかし、その内快復するだろうと思っていましたが、仲々調子が戻らないので、愈々これは胃潰瘍か癌にでもなったのではないかと心配になり、病院へ行って胃検診や治療をしたこともありました。

この年に限らず、何回か胃腸の調子がおかしくなったことがありましたが、本当にこの時期にな

りますと神経を使い、知らず知らずの内にプレッシャーが掛かっているのです。それが勝って出場権を獲得すると二・三日のうちに不思議な位にけろっと治ってしまいます。

また一方、外部からのプレッシャーもいやと言う程味わいました。これはチームが強くなればなつたで、周囲の期待感が重くのし掛り、プレッシャーが一層増して来る感じがします。例えば、学校でも、OB会でも、父母会でも、兎に角熊谷工に関係ある皆様は、熊谷工が絶対に勝つもの、絶対に出場するものと決めているのですから、私達はこの期待に応えようとするからプレッシャーは益々掛かって来ます。ラグビーは野球の様に意外性はないと言われていますが、しかし、勝負には絶対と言うことはないのだから、熊谷工ラグビーが強いからと言っても、毎年絶対に優勝し全国大会の出場権を獲得するとは限らないから、余計に神経を使わざるを得ないのです。

毎年毎年身の細い様なことを繰り返していると早くこんな境遇から抜け出して、のんびりとしたものだと思いますが、大会が終って新しいチーム作りになると、そんなことはすっかり忘れて、また全国大会出場を目指して、意欲と闘志を燃やしてしまうのですから、ラグビーには不思議な魅力があります。

私が定年退職になる最後の年などは、特に溜息が出る程の重圧を感じました。それは絶対に後は無かったからです。若しこの最後の年に出場出来なければ、一生涯死ぬまで悔いが残り後味の悪い思い出にはしたくないと、自分自身にプレッシャーをかけてしまった様な気がします。

幸いにして出場の目的も果すことが出来て、本大会でも準優勝と言う成績を収めることが出来たことに、選手並びに関係者の皆様に大変感謝しています。

#### ◇ バスの中で昼寝をする

第35回国民体育大会は栃木県で昭和55年に開催されましたが、その関東地区予選としてのミニ国体は横浜市の県営保土谷ラグビー場で8月29日に行われました。この年の少年の部の組み合わせは、籤運もよく本県と千葉の2県で国体出場を争うことになりました。

この当時の埼玉の高校レベルは、関東でも東京

に次ぐ位の実力を持つ様になっておりました。

順当であれば埼玉絶対有利と見られておりましたが、そうであっても勝負の世界は終って見る迄は分かりません。この時も用意周到に計画を立てた心算でありましたが、最後の結めで大失敗をしてしまった話です。本県代表は県大会で優勝した、熊谷工高の単独チームで出場しました。この日のキック・オフは午後4時30分ですから熊谷から行っても十分に間に合う時間ですが、長くバスに揺られてすぐ試合をやるのでは疲れるだろうし、また当日もし道路が混雑をして渋滞でもあったら大変と思い、大事を取って前日から旅館に泊り込み、当日は余裕をもって会場に着きたいと計画した訳です。

8月29日は予定通り余裕をもって会場に着きましたが、12時少し過ぎた位でしたので、キック・オフの4時30分までには大部時間がありましたので、バスの中で少し休んで試合開始1時間前になったら、ラグビースタイルをしてウォーミングアップをするよう指示をし、私はグラウンド内のスタンドで休憩をとっておりました。

その内に本校の前に行なわれる両チームの練習が始まりました。引き続いて試合が始まりましたので、それを見ておりました。時計を見るとぼつぼつ出て来る時間なのですが、仲々本校チームが出てこないのです。バスに行ってみると、バスの中で全員眠ってしまっているのです。私は慌ててすぐ起こして、試合前のウォーミングアップをさせました。

愈々キック・オフで試合が開始されましたが、両チーム一進一退の攻防のまま、時間ばかり刻々と過ぎて、仲々本校の調子が出ないでトライが出来ないのです。こんなはずじゃあなかったのにと思っている内に、逆に相手にペナルティゴールを決められて先行され、本校チームは焦りました。しかし、焦れば焦る程悪い方に作用してしまい、再び反則を犯してしまう状態で前半を終りました。後半は必ず挽回して得点をするだろう。必ず本校ペースに相手を巻き込むだろう。またそれだけの実力を持っているのだから、必ず逆転してくれるだろうと期待していましたが、結局8対16で敗れてしまいました。

その時は絶対に勝てると思っていた相手に敗けた口惜しさとショックで、ただ呆然とするばかり



で何故敗けたのか分かりませんし、考えても見ませんでした。数日後冷静に反省し、試合を振り返ってみました。結局試合前のバス内の昼寝によって、すっかり運動神経も休んでしまって、とうとう最後まで本調子になれず、気持ばかり焦ってチーム力を発揮出来ずに終わってしまったのだと思いました。その後もこの試合について、仲間の指導者達に「2軍でも勝てたのに、全く何にをやっていたのですかねえ」と笑われたことがありますが、只バスの中で昼寝をさせてしまった失敗に、返す言葉もありませんでした。これは指導者としての私の大失敗の一戦であり、悔いても悔いても取り返しつかぬものであり、二度とこの轍を踏むまいと思いました。

昭和60年、第40回の鳥取国体ラグビー少年の部が、倉吉市で開催されました。この年の全埼玉は熊谷工高を中心に行田工、深谷高の選手を補強してチームを結成しました。この年の第1回戦は、本県選手の調子が噛み合わず宮城県には大変苦戦しましたが、その後は第2回戦、準決勝と快勝して、決勝戦では奈良県を破り堂々と初優勝を果たしました。ここで話題にしたいのは、準決勝の対大阪戦に如何に臨んだかについてです。

全大阪は本大会の少年の部で、優勝候補の筆頭に挙げられておりました。大阪チームには多くの全日本高校候補選手等を擁した強豪チームですから、ラグビー関係者はやや大阪有利とみれます。しかし、勝負には絶対と言うことはありませんから、我が方もまた必勝の気構えでこれに対処しました。

準決勝戦は、10月24日2時30分キック・オフで行なわれました。そうすると午前中まるまる空いてしまう訳で、そうかと言って午前中練習することは考えられないし、さればと言って部屋でごろごろと休養させては、55年の神奈川のミニ国体の二の舞になるのではないかと思いました。そこで午前中は魚釣りをすることに決めました。

私達の宿舎は倉吉市の隣の東郷町で温泉も豊富に湧き出ており、旅館のすぐそばには東郷池と言う、定期船もあり、また対岸は遠くかすかに見える位の、湖にも匹敵する程の大きな池のある風光明媚な環境のよい町でした。

当日はいつもの通り起床し、散歩し、朝食をとりました。食後に本日の行動予定を発表した中で、

特に8時から11時までは前の池で魚釣りをすること、なおやったことのない者は、経験者に教えてもらってやること、またその日は快晴だったので必ず帽子をかぶることと言う条件をつけてやらせました。選手達は貸し釣竿を借りてあっちに5人、こっちに3人とワァー、ワァー、キャァー、キャァー歓声をあげながら魚釣を楽しみました。中には釣れなくて1時間位で飽きて、土産物を買に行つてよいかなどと言う者も二・三出ましたが、魚はよく釣れましたので大部分の生徒が、真剣になって魚釣りに打ち興じました。私も2時間位でしたが30~40匹位を釣り上げました。

一方大阪チームも同じ旅館に同宿していたのですが、殆ど旅館からは姿を現わしませんでした。魚釣りを終えて、丁度昼食の時に熊谷から3人程父母会の方が、当日応援に駆け付けまして、途中街で食事を取った時に、店の中でこんな話をしてくれました。

「埼玉は今日は大阪チームとやるけれど、どうせ負けて帰るのだからと、魚釣りをして遊んだり楽しんだりしているよ」、一方「大阪チームは午後の試合の為に休養をとっているそうですよ」と言っていましたと、父兄会の方も先生大丈夫ですかと心配している様子でした。

その時、私は運動神経を眠らせない様に、すこしでも動いて運動神経を働かせておくこと、魚釣り位では疲れません、却ってリラックスして調子が出ると思います。午後は選手達はきっと頑張ってくれますよと言っておきました。

以上、私の平凡なラグビー指導の一端と、まともないラグビー雑話について書きましたが、少しでも皆様に同感して戴くことや、参考になることでもあれば幸甚です。

以上